

# 2019年度じゃっどスタディツアー日程

2019/12/25-2019/12/31 (参加者 11名)

## 12月25日(水)

- 08:30 福岡空港集合
- 10:30 VN351 ベトナム航空 ホーチミン経由 プノンペン経由
- 19:00 ビエンチャン国際空港着 21:00 ディインホテル着
- 21:00 クアラオでラオス郷土料理。

## 12月26日(木)

- 08:00 カムアン県に向けて専用バスで出発 (コンサップ宅経由)
- 11:30 パクセンで昼食休憩
- 17:00 ツン村着 (道路状況は良好)
- 17:30 学生はホームステイ先へ 台所用品供与 (受け入れ家庭 4、村長 1)  
他は1時間かけてタケク市内メコンホテルへ移動

## 12月27日(金)

- 09:30 ツン村小学校集合 (ホテル 8:00 発) 村滞在者は笠づくり視察後村散策 (田植え、畑等見学)
- 10:50 郡教育局表敬訪問
- 11:30 ホストファミリー、校長、郡教育局関係者を招待し昼食会
- 13:30 市場視察
- 14:00 ツン村小学校に戻り、持参したタオル、文具、絵本 (6学校)、お土産を供与
- 15:00 村の結婚式前祭に参加
- 16:30 村解散 17:30 メコンホテル着

## 12月28日(土)

- 08:20 ツン村小学校集合 (ホテル 07:20 出発)
- 10:30 BACI (始まるまで生徒と交流)
- 12:00 贈与式 (フアナ村小学校 天井ファン6基供与) 学校関係者と昼食 文化交流
- 15:00 シホタボン仏塔寺院
- 17:00 メコンサンセット 19:00 夕食 (シンダート店休みのため近くの食堂)

## 12月29日(日)

- 06:00 托鉢
- 09:00 ホテル発 (8:30 出発予定が会計トラブル発生) ビエンチャンへ移動
- 14:00 昼食 15:00 ルンビンマーケット
- 16:00 ビエンチャン市内散策
- 18:00 シンダート夕食

## 12月30日(月)

- 08:30 ホテル出発 サムケ小学校へ
- 10:00 サムケ小学校着 天井ファン9基 供与 タオル供与
- 13:00 COPE、タットルアン寺院 →Dr.コンサップ宅訪問
- 19:45 VN920 ベトナム航空 ビエンチャン-ハノイ

## 12月31日(火)

- 01:30 VN356 ベトナム航空 ハノイ-福岡 07:20 福岡空港着 解散

## 国際的問題を考えるにあたって

志學館高等部 1年 田口加紗音

食べるのが無性に好きです。「ラオスへ行かないか？」と父から言われ、新たな食べ物との出会いに胸が躍り、さらに“国境なき医師団”への興味から参加を希望しました。もちろん、安くはないお金を出してもらうので、学べるものは何でも貪欲に学びつつつもりで。

出国前の1週間は、学年の取り組みで行ったSDGs\*1に関連するテーマの研究、その発表の準備に精神がすり減らされ、気持ちに余裕のない出国となりました。しかし、私が研究したテーマ、「フィリピンの児童労働」は同じ東南アジアのラオスは通じるところがたくさんあり、とても興味深かったです。

ラオスへ向かう空港で、理子さんから“きゅうりのキューちゃん”の話を聞きました。村の人が村の材料で漬物を作り、売って現金収入を得るための取り組み。この話を聞き、研究発表のとき、志學館大学の学長さんが、「貧困の解決に重要なのは現金収入だ。」とおっしゃられたのを思い出し、「実際にこんな風に取り組みがなされているんだ！」とすごく納得しました。しかし、村に行って話を聞くと、その取り組みはもうやっていないとのこと。なんでも、高い人件費が大きな負担になったとか。

このことから、私は、国際的な問題の解決に向けた取り組みを考え、実行するにあたって大切な2つのことを学びました。それは、「取り組みを『持続する』こと」と、「現地の正確な情報を得ること」です。前者については、たとえ取り組みがうまくはじめられたとしても、その成果が出て、さらにその地域に定着するまで続ていかなければ問題の本質的な解決には至らないということ。後者に関しては、国際的な問題の多くはその地域の歴史背景や文化をはじめとする多様な条件が複雑に関係しあっているため、その地域の特徴を知ることが、問題の根本的な原因を見つけることにつながり、より適した取り組みを考えられるということです。

ここで、やっと気づきました。まさに、このスタディーツアーは、この“取り組みの持続”と“正確な情報収集”を目的としているということ。さらに言うなら「じゃっど」の取り組み自体も、学校保健をラオスに普及させるために持続的な活動を行い、実際にラオス政府が働きかける仕組みができるまでに定着させており、また、ラオスに赴いて村の人々や信頼できる協力者たちとの交流を通してリアルな情報を得ているなど、この2つのことに重点を置いていると考えられること。おそらく、他の団体も同じように…。

“きゅうりのキューちゃん”は残念だったけど、こういうことの積み重ねの上で、今多くの人が国際的な問題に取り組んでいるんだと分かりました。そして、私もいつかその1人になりたい、と改めて思いました。

ちなみに、食べ物はセップ・ライ！\*2でした。



\*1 「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称。

すべての国連加盟国が2030年までの達成を目指す、貧困や教育、環境など17分野にわたる目標のこと。

\*2 とてもおいしいの意。

## ラオスと日本～じゃっどスタディツアーを経て～

川内商工高等学校 インテリア科 2年 森永梨紗子

2019年12月25日～31日までの6日間、私はじゃっどスタディツアーに参加させていただきました。その際に私がラオスで体験したことをまとめました。

### ラオス文化

- **仏教** ラオスは主に仏教を信仰とする国で、早朝には正装をして「托鉢」というオレンジ色の僧侶服をまとった修行僧に信者が功德としてもち米やお菓子を配るという儀式を体験することができました。
- **ラオス料理** もち米(カオ・ニャオ)を主食として手で食べられます。料理には川魚やハーブなどが使われており、ヘルシーで美味しい食事をお腹いっぱいとることができました。

### トゥン村 ホームステイ

- **生活様式** 早朝に起き、夜は9時頃に就寝。自宅の畑で取れた野菜や家畜などで自給自足といった感じでした。夕方には浴槽に溜めてある水で行水(アムナム)をしました。食事は熱々のうるち米(カオ・チャオ)にスープやディップを付けて食べました。
- **伝統** 村の小学校で歓迎の儀式としてパーシーを体験させていただきました。きれいなマリーゴールドにかけられたミサンガをたくさんの村の方々がおまじないをかけながら両腕に結んでくださいました。
- **学校** 村の小学校とビエンチャン市内の小学校と交流させていただきました。子供たちに日本から持ってきたタオルやお菓子、おもちゃをあげると、とても気に入ってくれている様子でした。おもちゃで一緒に遊んだ際には、元気いっぴいでのびのびとした雰囲気が見受けられました。



### 観光

- **タートルアン** ラオスを代表する仏塔のひとつであり、塔内にはブッダの遺物があるといわれています。過去、何度か改築・修復を繰り返し今の黄金の見た目となったそうです。塔内に入ることにはできませんが、その周りでは歴史的な仏像や石碑などが展示されていました。

### ベトナム戦争

- **資料館** 「史上最も空爆された国」といわれるほど、ベトナム戦争の際に200万トン以上の爆弾がラオス本土に落とされたそうです。今も尚、地雷や不発弾は数多く残っており、たくさんの人々が爆弾の被害にあっていることを知りました。

じゃっどスタディツアーの中でラオスと日本の繋がりを強く感じました。空港や市内でよく日本の国旗を目にしたり、ホームステイ先や学校で日本人の私たちをととても歓迎してくださったり…。それは空港の建設や学校の施設設備、不発弾の撤去などで日本がラオスに支援を続けてきたからであって、この友好的な関係が今後も続いてほしいと思いました。

## ラオスで学んだ1週間

川内高等学校2年 久富木千夏

今回、私は友人のおかげでこのスタディーツアーの存在を知り、参加することができました。このツアーでは、現地の子ども達とふれ合う機会があり、子どもが好きで、将来は学校教育関係の仕事に就きたいと思っている私にとって、とても魅力的な機会に参加できてとても勉強になりました。

実際にラオスに行って、私はたくさんのことを知り、感動しました。

ホームステイでは、最初は全く言葉が通じないことにとっても焦り、不安を感じました。しかし、ホームステイ先の子ども達と、折り紙をしたりトランプをしたりして遊ぶことで、仲良くなることができました。私は人と仲良くなるためには、まず第一に言葉が通じることが大切だと思っていましたが、言葉が通じなくても、楽しい時間を過ごし、仲良くなれたことにとっても感動しました。そして、同じ言葉を使って話すことができたなら、お互いもっと楽しむことができたろうな、と思いました。私は生まれてからずっと言葉が通じる環境で生きてきたので、今回のツアーで初めて、言葉の大切さを身をもって感じることができました。

ツン村の学校視察では、多くの子ども達とふれ合うことができ、とても楽しかったです。みんなとても素直で優しくかったです。一緒にしゃぼん玉で遊んでいたら、みんなが平等にできるようにと、仲良く譲り合いながら遊んでいたのが、「小学校低学年くらいの年齢なのに、なんて気遣いができて優しい子達なんだろう。」と思いました。また、折り紙がとても人気で、動く鶴を折ると、「私にもちょうだい！」と言う子がたくさんいました。外国の人に日本の文化を伝えることは、非日常的なことでもとても楽しかったです。私の大好きな日本の遊びを「楽しい！」と言ってもらえると、「日本って楽しい国なんだね。」と言ってもらえるような気がして、とても嬉しくなりました。

私はホームステイやツン村視察の他にも、ラオスのいろいろなところを見て、たくさんのことを知ることができました。今回のツアー中に特に注意を向けていた教育に関しても、ラオス独特のいい教育を学ぶことができました。今回学んだことを自分なりにまとめ、自分のものにし、将来の夢に生かすとともに、「ラオスってこんなにいい国なんだよ！」ということを、私の身近な人に発信していこうと思います。

最後に、今回このツアーに行くために支援してくださった皆さん、本当にありがとうございました。



## じゃっどスタディツアーを通して

川内高等学校2年 畠中萌々子

私は将来助産師として働くことを目標としています。また、以前から発展途上国への支援活動や、国際協力に興味がありました。このスタディツアーは、祖母の紹介で学生募集があることを知り迷うことなく応募することを決めました。

現地に着くまで楽しみもあり不安もありました。しかし、いざ現地に着くとたくさんの子どもたちが花束や首飾りを作って日本から来た私たちを盛大に歓迎してくれて、不安など飛んで行ってしまうほど嬉しかったです。あの時にもらった花束は今でも私の宝物です。

2日間のホームステイでは多くのことを学ぶことができました。初めは言葉の通じない不安もありましたが、日本の折り紙を通じて打ち解けることができました。私はこのホームステイで日本での恵まれた生活が決して当たり前でないことを改めて感じました。家の中に水道があり、トイレはレバーひとつで流れる、実際体験してみるとこれらのことが感謝すべきことだと分かっていたようで分かりきっていないように思えました。

小学校訪問では現地の子どもたちはみんな笑顔で元気で、たくさん走り回って遊びました。私の名前を呼んでくれたときや、日本からのタオルやお菓子をとても喜んでくれたときはすごく嬉しかったです。

今回のラオスで学んだことは、私にとってとても大きな意味を持つものになりました。これらのことは私の周りの多くの人に伝えていきたいと思います。そして私にできることは小さなことかもしれませんが、力になりたいと思いました。また、今回の経験を糧に目標としている看護学を学び、将来医療面・看護面で途上国に対する支援ができるよう頑張りたいです。

今回のスタディツアーに関わってくくださった全ての方々に感謝します。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



## 「たくさんの出会いにコップチャイ！ in ラオス」

鹿児島大学農学部食料生命科学科 4年 佐々木真歩

「まほちゃん、これ興味ありそう！」ボランティアセンターの前にあったじゃっどのチラシを見せてくれた友達の一音のお陰で私はこの活動を知ることが出来た。大学2年生の時、カンボジアの日本語学校を訪問し、ここで先生として働きたい、また戻ってきたいと目標ができ、発展途上国に興味を持つようになった。ラオスはカンボジアの隣にある国ということしか知らなかったが、カンボジアのように実際行くことで、自分の知らない世界を知ることができるのではないかと思い、参加を決意した。

ラオスでの日々は、たくさんの温かさを感じた濃い1週間だった。特に、ツン村での生活は心に残っている。ホームステイ先に着くと、はじめ言葉の壁にどうしていいかわからなかったが、すぐにそんなことは感じなくなった。それは、一緒にホームステイしたまりちゃんの明るさや、ホームステイ先のファミリーの温かさのお陰だ。毎日、美味しい料理を作ってくれたママさんやウォンちゃん、優しく迎えてくれたパパさんや、ハンサムなトン君、近所みんな、一緒にご飯を食べたり、全力で風船遊びをしたり、本当の家族のような温かさを感じる事が出来た。最終日には、みんなで一緒に円になって「夢をかなえてドラえもん」「パプリカ」歌って踊った。音楽が大好きな私にとって、国境を越えて音楽を楽しめたことは、心の底から感動し、一生忘れられない思い出になった。帰国後、この曲を聴くと、みんなのキラキラの笑顔とラオスの素敵な風景、バスの中でみんなと練習した楽しい思い出が思い浮かび懐かしく感じる。この先、頑張りたい時はこの曲を聴いてパワーをもらいたいと思う。

ラオスの生活は、ニワトリの元気な声で起床し、みんなで朝食を食べて、日々の生活がスタートする穏やかな日常であった。ご近所さん同士仲が良く、村一体が家族のように大切にされていて、優しさがにじみ出ていた。そのツン村に、まだ不発弾があることを、メディカルセンターを訪問した時に知った。戦争の恐ろしさ、自分が何もできないことに悔しさを感じた。また、教室の天井がなく暑さで、倒れる子がいるということも、小学校の現状であることを知った。天井や空調もある教室で、授業を受けることが出来る環境、普段の生活が当たり前になってしまっていた。直接的には、自分では何もできないが、今自分にできることは、自分の好きなことが出来る環境、研究に打ち込める環境が当たり前だと思わず、一生懸命自分のできることを精一杯頑張ることだと思ふ。何も知らなかったラオスが、出会ったみんなの優しさのお陰で大好きになった。自分からチャレンジする気持ちを大切に、将来自分の目標を成し遂げられるよう頑張りたい。そして、必ずまたツン村のみんなに、成長した姿で会いに行きたい。



じゃっどの皆さん、一緒に行った最高の仲間から感謝したい。コップチャイ！\*1

\*1 ありがとうの意。

## じゃっどスタディツアー2019in ラオス 感想レポート

鹿児島大学医学部医学科5年 大谷昂

レポートというと、たいていは不真面目な大学生が提出日前夜にファミレスにて徹夜で仕上げるものであり、かくいう私もそのようなものをいくつも書き上げてきた。しかしながら今回はラオスでの日々を思い出しながら、感じたことや思ったことをなるべくそのままに伝えるべく、時間をかけ推敲を重ねて書き上げた。ラオスでの出来事を一つ一つ振り返りながらの作業、ついつい乗り気になって余計なことまで書いてしまったが、そこも含めて楽しいものであった。それでは本題に入ろう。

私が今回のスタディツアーに参加したのは二つの動機がある。一つ目は知見を広めたかったから。これまで知らなかった世界や物の見方に触れることで自分自身の考え方や物事の捉え方が変化していく過程はとても刺激的であり、まさに今回の企画によってこれらの体験が得られると考えた。二つ目、むしろこちらの理由が主となるのだが純粋に「面白そう」と感じたからだ。行ったことのない国、現地の人々との交流、異文化とのふれ合い。これらのどれをとっても魅力的であり、このような体験ができるチャンスを逃してはいけないと考え、企画を知ってすぐに応募した。

まずは10月に顔合わせがあったのだが、大学生2人、高校生4人、しかも自分以外の参加学生は全員女子というメンバーで、「これ仲良くなれるのかな…」と思ったのだがこれが杞憂に終わってくれて本当によかった。出発までの準備としてタオル集めと絵本作りがあったが、これが存外大変であった。タオルは思うように集まらず、最終的に実家から送ってもらう羽目に。絵本の方は殊更に大変で、その中でも一番の強敵はスーホの白い馬、翻訳用紙8ページの超大作である。ただでさえ多い作業に加え、はみ出した部分を紙の切れ端で埋めるなどし、大技小技を駆使しての戦いは実に5時間を超えた。最後の一冊を仕上げた時には午前3時を回っており、手伝ってくれた友人にはラーメンを奢った。これで許せ。

さて12月25日、いよいよ出発である。福岡空港→ホーチミン→ヴィエンチャンを約半日かけての移動、時差は二時間と比較的少なかったが、やはり長時間の移動ということもあり、ついたころにはくたくたであった。この日の夕食はラオスの伝統的な料理。赤飯やスープなどあったのだが、一番の個人的ヒットはビアラオ。以降大量に飲むことになる。



12月26日、この日も大部分の時間を移動に費やした。ようやく学校についたのは5時頃だったが、多くの子供が残ってくれており大いに歓迎された。その後トラックの荷台に乗って村まで移動し、各々民泊先の家にとどり着くと、周りの家の子供たちが物珍しそうに集まってきた。言葉も通じないし何をしようかと思い、とりあえず追いかけてまわしてみたがこれが案外と捕まらない。家の裏に逃げられる。そこで秘密兵器のシャボン玉を取り出すと、見る見るうちに子供が寄ってきてはしゃぎだした。やはり子供、ラオスといえども本質は変わらない。近づいてきた子供を捕まえては担ぎ、振り回し、追いかける、こんなことばかりしていたのだがそれなりに楽しんでもらえたようで、10分もすれば打ち解けた。気づけば辺りは暗く、汗を冷やす風が心地いい。この光景、この空気は今でも脳裏から離れない。夕食はカオニャオ、野菜と肉を炒めたもの、ナンプラーである。ラオスでの食事はどれもおいしかったが結局一番おいしかったのは村での食事だった。炒め物とナンプラーのコンボでカオニャオが止まらない。余談だが実家に帰って体重を測ると2キロも増えていた。おそらくカオニャオの食べ過ぎであろう。

12月27日は村の中の見学と小学校への訪問が主であった。村では笠作りと機織りを見学させてもらった。機織りの方は好きだからやっているという側面が強そうであったが、笠作りは日本で言う内職のようなもので、一つ2~30円ほど売れるらしい。村の世帯平均年収なども気になった。主に農業で生計を立てているような感じだったが、実際の経済的な状況、さらに生活に迫るのであれば家計のやりくりなども知る機会があればよかったのだが仕方がない。小学校では相変わらずシャボン玉が人気だったのだが、いかんせん人数が多い分、余計に体力を使う。揃いも揃って追いかけてくる、おいやめろ、皆で囲って帽子を取るな。校庭で走り回るのは小学生の得意分野、敵うわけもなかった。学校から帰る途中、村の人の結婚式前夜祭に飛び入り参加させてもらった。文化だから、といわれてしまえばそれまでなのだが、見ず知らずの私たちが招き入れてともに楽しもうとする人々の雰囲気はとても居心地のいいものであった。その夜は参加学生の皆で集まり、村の人にカレーを作って振る舞った。具はよくわからない葉っぱとキャベツだけ。それでも、お世話になった人達と食べるカレーは格別で、結局3杯も食べてしまった。太るわけだ。





12月28日、この村最後の日である。朝、行水をした後ご飯を食べて小学校へと向かう。小学校ではパーシーという歓迎の儀式をしてもらった。両手にこんなにたくさんの糸を結ばれることは今後ないのだろう。言葉は通じない、しかしみな何かを祈ってくれた。歓迎、感謝、旅の無事、あの優しい笑顔でかけてくれた言葉はいったい何だったのだろうか。その後互いに出し物をしあった。小学生たちの踊りに比べてこちらの歌はお世辞にも上手いとは言えなかったが、それでも楽しそうに聞いてくれた。正直ひやひやだったが喜んでくれてよかった。さてそこまではよかったのだ。が、ここから気を良くした教育長による無限盆踊りループが始まる。こちらの体力も考えて欲しいところではあるが、歓迎とあっては仕方ない。しかも踊るごとにラオラオのお酌がついてくる。好意は無駄にできない、と一息に飲み干す。うん、いい感じ。「これで最後」を三度ほど経てようやくお開きとなった。別れはいつでも感慨深い、おそらく今後二度と会うことのない人達となれば尚更だ。互いが元の日常に戻り、いつかは思い出せなくなる日もくるかもしれない。それでもこの3日間は私に大きなものを与えた。一期一会とはまさにこのことなのだろう。そこからメコンホテルに移動し、サンセットを見ながらビアラオを飲み、近くで夕食を食べ、屋台でデザートを食べ、近くのマッサージ店に行った。非常に充実した一日だった。

12月29日は早朝6時前にホテル近くの通りで托鉢を体験した。まさに宗教的な文化である。日本では仏教、キリスト教などが普及しているが、ベースとしてアニミズムがあるため、日常的に宗教を感じるような文化はそれほど多くないように感じる。代わりに地域の伝統的な行事が多いような印象だ。このような違いを感じることができるのも異文化圏ならではの体験であった。昼食後、ホテルに行く前にスーパーマーケットでお土産を買うことになった。まずは実家用にコーヒーや塩、ビアラオなどを買い、友達や部活用にばらまけるお菓子も買った。ビアラオは1缶7,000キープと日本に比べてかなり安く、更にコンビニでも値段が変わらないことに驚いた。日本ではありえない話だ。おそらく経済的な仕組みが違うのだろう、社会主義圏というのに関係があるかもしれないがあくまで想像の話だ。お土産をスーパーで買うというのも日本ではあまりやらないが、存外楽しいものであった。知らない国のスーパーというのはその国の生活そのものに近いものがある。調味料やお菓子などのコーナーを買うあてもないままぶらぶらと散策するのは心躍るものがあった。この日の夕食の焼肉では、豚の乳房など日本では食べる機会のない部位もあり、改めて食文化の違いを体感することとなった。



12月30日はまた別の小学校に訪問した。この小学校もかねてより支援を行っているようで、先生たちの信頼がうかがえた。遠く異国の地でここまでの関係を築くのはいったいどれほどの時間と労力を注ぎ込んだのか、想像さえできない。すごい、以外の言葉が見つからないのが口惜しい。歓迎会も終わりを迎えたころ、二度目のドラえもんタイムが発動した。突然の指名、うろたえる学生、消した音源、大ピンチである。なんとかアカペラで乗り切ったものの、これが日本だったらと考えるとゾッとする。ラオスでよかった。ラオス万歳。その後、予定にはなかったがリハビリセンターにも訪れた。ラオスに落とされた爆弾の数、不発弾による被害。どれも痛烈に私の心に刺さるものばかりであり、自分はまだまだ知らないことがたくさんあるということを感じ知らされた。国際問題やその背景にある歴史への興味・関心というのはやはり最低限持つべきなのだろう。午後に訪れた寺院はツアーガイドなしでの観光は罰金が取られるため一人での行動となった。きちんと歴史などを理解しながら見て回るのが礼儀なのだろうが、何もわからないまま、自由気ままにぶらぶらと歩きまわるのもまた一興。寺院は一言でいうと「全身金ピカ」。掲示の内容はわからなかったがどうやら修復後の姿のようだった。いつ、誰が、何のために、どうやって作ったのだろうか。文化、宗教というのはつくづく面白い。その後はソムチット先生の葬儀に参加した。じゃっどの活動にも関わっていた先生、是非一度お会いしてみたかったのだが残念だ。ラオスの医療の現状・問題点・取り組みなどについてお話を伺ってみたかった。さて残すは帰宅のみ。空港につき、飛行機に乗り、福岡に戻ってくるのはあっという間だった。解散は名残惜しかったが、来年度の再開を楽しみに帰路についた。ちなみに日本について最初に食べたのは博多のとんこつラーメン。ビバ日本。



曲がりなりにも医学を学んでいる身として、今回のツアーでは公衆衛生などの観点から学習を深めてやろう、そのような意気込みを持って臨んだのだがそうはいかなかった。食べ物、土地、文化すべてが新鮮で、私は考える隙を与えられないまま圧倒されるしかなかった。しかしそれでも今回の体験を感じたままにしておくのはもったいない。そこで二つの考察を残したいと思う。

一つ目はラオスという国の発展について。東南アジア諸国は人口の多い国も多く、各国からビジネスという観点からも注目されている国が増えている中で、なぜラオスはその例

に漏れるのか。人口の少なさや自国産業の少なさだけがその原因ではないはずだ。ラオスという国の現状に興味を持ち、その根本にある問題は何なのかということを考えなければならない。教育、行政、経済、医療などすべての要素は決して独立した問題ではなく、むしろ総括的に解決していかなければならないものなのであろう。たかが一週間ラオスに滞在しただけでこのようなことを書くのには正直ためらいもあった。しかしながらツン村での生活を経て、今後の生活水準の改善などに思いをはせずにはいられずにはいられなかったため、勝手ながらこのような考察をさせていただいた。

二つ目は幸せというものについて。上の内容と被る部分はあるが、やはり今回のツアーで一番印象に残ったのはツン村での民泊であった。文化の違いという面もあるが、それでも日本での日常に比べると「不便」を感じる側面は多かった。ライフラインの整備はされておらず、衛生面の観点からも問題を感じる部分は決して少なくなかった。しかしそのような中でも子供たちの笑い声は絶えず、村での生活のあらゆる場面で人々の笑顔があった。恵まれた環境下で生活をおくる私たちは、果たして今の生活にどれほど幸せを感じているだろうか。感謝の気持ちを持ちなさいと言いたいのではない。ただ、このような深さまで思考を落としていくということも、たまには必要なのかもしれない。

最後に、今回のツアーに携わっていただいたじゃっどのスタッフの方々、歓迎して下さった現地の人々、ホストファミリー、そしてともにツアーに参加した学生に大きな感謝の気持ちを伝えたい。このような機会に恵まれたのはとても幸運なことであり、本当に自由気ままに楽しませていただいた。有難う御座いました。

それでは、感想レポートこれにて終幕。

